

社寺巡礼

地域で受け継ぐ悠久の歴史

時を超えて大いなる恵みをもたらしてきた鹿島灘や利根川の大自然、常陸国風土記にも登場する悠久の歴史、何百年も前から受け継がれてきた伝統行事。そうした時の流れの延長線上に、今の神栖市があります。鹿島開発でまちの姿はすっかり変わりましたが、社寺の佇まいは昔のまま、人々のよりどころであり続けてきました。改めて身近な社寺に目を向けてみると、地域の財産ともいえる由緒や伝説、文化財の数々と出会うことができます。新しい年の始まり、今年の初詣は近くの社寺を訪ねてみませんか。



蚕霊神社



金色姫立像(星福寺内)

養蚕発祥の地と金色姫伝説

こんもりとした森に抱かれるように建つ蚕霊神社。かつては、養蚕に関わる人たちの信仰を集めていました。

この神社に伝わるのが「金色姫伝説」です。昔、天竺(今のインド)の金色姫が、継母によって国を追われ日川の地へ流れ着き、権大夫に救われました。姫は病死してしまいますが、その後、美しい繭となり、その糸を織る産業が各地に広まったとされています。のちに蚕霊神社は、養蚕の創始の象徴として建てられたと伝えられています。

神栖市歴史民俗資料館の資料によると、日川地区は6世紀中頃に金色姫がインドから養蚕を伝えた養蚕発祥の地とされています。神栖地区では明治の中頃から養蚕が盛んになり、昭和58年まで行なわれていました。金色姫伝説を持つ神社は県内に3カ所あり、「常陸国の三蚕神社」と呼ばれています。また、蚕霊神社に所縁のある星福寺には金色姫立像が安置されています。

【所在地】日川720

とりまつり 酉祭

鳥(鴨)を奉納するお祭りで、11月の最初の酉の日に行なわれます。酉祭の儀式に詳しい保立健さんに話を聞きました。

「まず、前祝いとして七の膳の儀が行なわれます。これは膳の並べ方まで詳細に決まっています。その後、蚕霊神社に奉納し、宮渡しの儀に移ります。この儀式では下番(現在の当番)組、上番(次の当番)組それぞれの当番家、役員が三献の盃を酌み交わし、当番家を引き継ぎます。続いて宮送りの儀。下番組の当番家から上番組の当番家へ宮(小さな祠)が引き継がれ、一連の儀式が完了します。

宮を預かる当番家は、1年間「四つ足」の動物を食べない、という風習が残っています。これは継母に迫害された金色姫が四つ

足の動物に助けられた、という言い伝えによるものです。酉祭をはじめ、今まで継承してきたものを若い人に引き継いでもらいたいと願っています。」

七の膳の儀

宮送りの儀